

生涯学習＝資源枯渇のない「消費」

西村 美東士 (にしむら みとし)

徳島大学・大学開放実践センター助教授

生涯学習＝資源枯渇のない消費

H13.4.15/関西消費者協会

消費者情報320号

PROFILE

◆専門分野 生涯学習、社会教育、青少年教育、パソコン・インターネット活用 ◆著書『生涯学習か・く・ろ・ん』『こ・こ・ろ生涯学習』『癒しの生涯学習』
(ともに学文社)『個が「善く生きる」ための生涯学習』(共編著・社会教育協会) ◆役職・委員 徳島市学遊塾運動アドバイザー

消費とは使つて なくすこと?

消費という言葉は辞書で調べると「使つてなくすこと」とある。確かにそうかもしれない。生涯学習だって、今やけつこうな金がかかる。私がこれだと思ひ出すのが、「自分らしさ」のことである。学生に「自分らしくいられるところ」を聞くと、真っ先に「自分の部屋」という答えが返ってくる。他者と接すると、気を「使つて」「自分らしさをも」「なくしてしまふ」ということなのだ。う。生活して消費すれば、自己の蓄えを減らす。地球資源も消費してしまふ。それがあまりひどいと、自分や人々の生活がささむ。また、共感や信頼感のもてないままに人と接すれば、自分らしさを見失ふ。そうすると、人と接するのがいやになる。本論では、このような現代人の悲しい「消費の宿命」をもっと幸せな「消費」に転換させる要素の一つとして、生涯学習のあり方を提案したい。

もちろん、ここで論じようとしていることは、生涯学習を節約して行う方法などではない。それも賢い消費者としては必要だろうが、それよりもここでは、金銭やエネルギーを使つてでも自分なりの生涯学習

人生の風景を味わう ための自己決定活動

活動を行うことによって、生活が潤い、学習仲間との交流のなかで「自分らしさ」を再発見し、さらには地球の資源やエネルギーの枯渇を食い止めることにもつながるという機能に注目する。そこでは、生涯学習は、「賢い消費」というよりも、「共に生きようとする消費」といってもよいかもしれない。

ある女子学生が次のようなことを私にいったことがある。

「きのう、おうち(下宿先)に帰る途中、これって人生みたいだなと思つた。おうちが『死』であるとする、それに向かつて歩いていくのが人生で、そこには二つの焼方がある。ひとつは、おうちだけを指して、寄り道もしないで、まっすぐに効率よく歩く焼方。もう一つは、人々たちをあざ笑つたり、ましてや責めたりする気持ちはまったくない。でも、自分自身は、もうひとつの焼方をしたいということに気づいた。それは、友だちのところに会いに行ったり、途中の森に入り込んで散歩してみたりして、人生の風景を味わいながら帰る、という焼方」

しかも、「人生の風景を味わう」ほうの生き方には、「エネルギーを使うけど」という前置きがつかない。まさにこれが生涯学習の姿だ。生涯学習のこのような自己決定活動は、「効率よく生きる」とは違つて多大のエネルギーを消費する。自分がやろうとしてやり始めた生涯学習活動なのに、人と出会うことによってかえつて自分自身が傷ついてしまったら、専門の世界を散歩しているうちにさ迷い込んでしまつたりすることももあるだろう。生涯学習は「エネルギーを使うけど」という前提も含めて自己決定することなのであり、他者に強制することには誰にもできない。

ただし、もう一方で、人は自己決定だけで生きているわけではない。他者や社会のなかで関連付けられながら生きている。このことについては後半で考えたい。

現代人の活動としての 生涯学習

生涯学習は現代世界に特有の考え方である。

1965年、ユネスコの第3回成人教育推進国際委員会において、ポール・ラングランによって生涯



教育が提唱された。そこでは、人間の全生涯にわたって教育機会を提供することなどの理念が説かれ、また、人の一生という時系列に沿った垂直的な次元と、個人および社会の生活全体にわたる水平的な次元との双方について、必要な統合を達成すべきであることが強調された。

72年には、ユネスコ教育開発国際委員会が、『未来の学習』(Learning to Learn)というレポートを提出した。^{『L』}とは人間として存在するという意味であり、そのための学習(Learning)ということになる。従来の「知る」(地位や財産などを得ること)のただの学習からの転換が叫ばれたのだ。そこでは、すべての人は生涯を通じて学習を続けることが可能でなければならないこと、そして、そういう生涯教育の考え方は学習社会の中心的思想であることが明らかにされ、学習社会の建設が提唱された。

わが国の文教施策においても、『社会環境の急速な変化』(71年中央教育審議会答申)、「急激な社会構造の変化」(同年社会教育審議会答申)のなかで、生涯の各時期にわたる社会の教育機能が重視されるようになった。

右のように、生涯教育は、現代社会のなかで新しく生まれた考え

方であり、「人生はすべて勉強」といったような「修養論」とは異質のものである。また、一部に誤解されているような社会的活動を引退した者のための教育でもない。

最近では、学習者の立場からの生涯学習という言葉のほうがよく使われるが、生涯学習は生涯教育以上に現代社会の特徴的な行為といえる。私は、「自分らしく生きたい」、「もうひとつの自分を見つきたい」というような、新たな意味での「^{『L』}」のための生涯学習や、さらには、「^{『L』}」から「^{『L』}」(共に生きる)への発展に、今の「時代」を見る思いがする。

限りある地球、 限りなき学習

1979年、世界各国の有識者からなるローマクラブが、「限界なき学習」という報告書を出した。ローマクラブはもとも人口、資源、環境、エネルギーなどの地球規模の問題を協議してきた団体である。この報告書では、技術文明への危機感から、その克服手段を模索し、人間が危機について予知し回避するために不可欠な方策として、生涯学習を提唱した。資源やエネルギーは無尽蔵ではなく、限界があ

り、人類はその限界に気づかなければいけないが、そのためには学習の革新が不可欠であり、しかも、その生涯学習は資源やエネルギーと異なって無限に広がり豊かになるものであると強調したのである。

地球資源は枯渇する危険性があるが、その枯渇を防ごうとする人々の学習は枯渇しないどころか、限りなく発展する可能性をもっているといえる。

97年7月、ハンブルクでユネスコの第5回国際成人教育会議が開かれ、「成人学習に関するハンブルク宣言」が提出された。そこでは、政府だけでなく、NGO等の参加により、学習機会の平等、質の向上、市民参加などのためのアジェンダ(政策提言)づくりが行われた。会議のテーマは識字、女性のエンパワメント、メディア、マイノリティ、国際協力などであり、「環境および開発問題」については、各個人の資質向上をめざし、それにより、社会全体の問題として行政と市民との話し合いを促進するよう提起されている。宣言ではこのように、全体を通して、権利や喜びであると同時に「分かちあうべき責任」として成人学習をとらえている。

地球規模の生態系の危機、経済危機、文化的危機のなか、学びと

行動の限りのない好循環の可能性を実現する生涯学習に期待が寄せられている。

生涯学習における 対他者関係の意味

それでは、個人にとって生涯学習は、自己内で完結する活動のほかに、どんな意味があるのか。

人は他者からストロークをもらうことによって生きている。ストロークとは交流分析の用語で、「私はあなたの存在に気づいていますよ」と伝える行為である。自分の時間を相手に与える愛の行為ともいえる。身体的（スキンシップ）、言語的（挨拶、励まし等）、非言語的（まなざし、うなずき、傾聴等）の3種、肯定的、否定的の2種、条件付、無条件の2種がある。

ストロークには、「貸し合いのほかに貸し、富めるものはますます富を増す」という言葉があり、ストローク経済の法則と呼ばれる。ストロークを上手に出せれば、相手からも肯定的なストロークが返ってきて、使えば使うほど自分の「財産」は増えていくのである。ボランティアは「精神的で微妙な見返りが期待できる行為」といわれるが、こ

れも同様のことを表しているのだらう。

生涯学習の世界も、「教える人は学ぶ人、学ぶ人は教える人」「教えることは学ぶこと、学ぶことは教えること」という混沌とした世界である。新規参入の初心者があれば、多くの人が快く教えてあげようとする。このようにして充電、学ばせと放電（伝える）が行き交う。学歴社会が同質の者が上下に競う社会であったのに対して、生涯学習社会は異質の者が水平に交流する社会であるといえる。「してあげる、してもらい」のスムーズなストローク交流の関係が、生涯学習の持ち味なのである。

このような他者との出会い（対他）によって、自己に向かつて立ち返り（対自）、その自己を他者や社会のなかで関連付けながら、再び、自己に戻って深めていくことができる。もちろん、そこでの対自、対他の活動には、これを避けてきたときにはなかった悩みや苦しみが生じよう。しかし、それは本人にとって「意味の充満した時間」でもある。生涯学習、ボランティア、市民活動に共通するのは、それがエネルギーを消費することを覚悟した社会的自己決定活動であるということと、それだけに「群衆のなかの孤独」とは正反対の「他者との意味ある出会い」ができるということである。

居場所としての生涯学習

これは「他者との意味ある出会い」ができるということである。

しかし、このように対自と対他がうまく循環するためには、その場が「自分らしさ」を安心して出せると感じられる「居場所」でなくてはならない。また、他者に向けたエネルギーが報われるためには、たとえ価値観や意見が異なっても、その根底には信頼関係に裏打ちされた「支持的風土」が根付いていなければならない。そうでなければ、自分の意見が通らないたびに、疎外感や孤独を感じてしまうことになる。

ある市の男子成人のグループ（仮名）の「守っていること」は次のとおりである。①政治・宗教を持ち込まない（議員メンバーは複数の数いる）②会長をおかない（対外的にはおくとともにある）③会費をとらない④職場の同僚、社会的地位、過去の経緯を持ち込まない⑤来るもの来るのも拒まない⑥さん付けで呼びあう⑦多様性を尊重（排他的にならず、少数意見を尊重する）⑧集まるときは、自分で作ったツマミと自分の飲み物を持参する。

このようないわゆる「親父の会」が現在、増えつつある。職場で自分のだけではあき足らず、地域で他の親父たちとのまさに水平異質交流と友達つなぎを求め、そこで自分らしさの発見や町づくりなどの社会貢献の楽しみを味わうのだ。F会の「守っていること」には、メンバーの親父たちの潔さ、それゆえの楽しさがにじみ出ている。

また、私は92年から、東京都江市中央公民館の青年教室（狛江ブータロー教室（通称狛江ブー）の青年教室の年間講師として、「あるがままの自分が両手を広げて歓迎される」「重しのサンマ（時間・空間・仲間）」をつくらうとしてきた。狛江ブーでは、ブータローの自由な精神をめざして、「一年に1回来てもメンバーだ」というネットワーク型運営が行われてきた。図1は、当時、そこでのサンマを若者が絵にしてくれたものである。

「親父の会」や「狛江ブー」のような対等で自由な関係こそ、自己決定活動である生涯学習の強みである。そういう時間・空間のなかで、人にエネルギーを分けてあげることは、自分のエネルギーを減らすどころか、自他ともに増やす結果につながる。

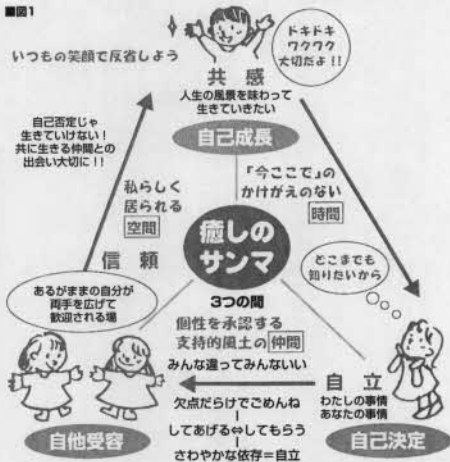
地球と「自分らしさ」を守る生涯学習

限りがあるというのが、地球の宿命である。その資源を食いつくし、ゴミばかり大量に排出するような「消費」は、反省されなければならない。そのためには、学歴を得たり、充電したりするだけのための従来の学習から、地球を最大

限に生き延ばそうとする行動と結びついた生涯学習への転換が求められている。

一方、そういう「地球の消費者」の一人として生きている学生に、「何で生きているの？」と聞くと、一番多い答えは「生まれちゃったから」であり、その次が「死ぬのが怖いから」である。自分が生まれたことと自分がそのそも「自己」決定ではないというの、人間の宿命といえよう。

図1



人間は、限られた地球の上で、限られた命を、しかも他者や社会との関わりの中でしか生きていけないのである。

そのとき、現代人の抱える問題の一つが、ヤマアラシジレンマである。これは、接近したいが、かといって、お互いの針で傷つけ合いたくはないというジレンマである。また、親密になりすぎて距離がとれなくなると、「他者のために」自分らしさがねじ曲げられてしまったと感じることになる。

これに対して、生涯学習などの自己決定活動は、自己の人生の有限時間のなかで「自分のために」心と体を使う活動である。だから、生涯学習は自分らしさを曲げる場ではない。むしろ、生涯学習の対他、対社会の活動のなかでこそ、より深い自分に限りなく気づくことができる。個は他者と関わることによって、より深まるという。自分らしさは気づき、創り出されていくものなのだ。

そのためには、個人の視点からいえば、心と体をあえて使うという「積極性」を、うまく自己管理することが必要になる。ここに私の作成した積極×消極の4分類の表を示す(表1)。IとIVは自己の内部で運動関係にある。個がIのような生涯学習をするためには、どこかでIVの

表1 積極×消極の4分類

	主体	外見	動機度	自己決定	決定要因と動機	特徴と変化への姿勢
I	積極的	積極	中	大	したいからする	自己決定(生涯学習)
	逃避せず	に挑戦	自分のためにする			変化を歓迎
II	消極的	積極	大	小	せねばならないからする	飯面・戦術(受動勉強)
	不安からの逃避	ひとのためにする			変化を受け入れ	
III	消極的	消極	小	小	せねばないけどできない	敗北主義(被害者意識)
	自己嫌悪・不安	ひとのせいではない			変化を恐怖	
IV	積極的	消極	無	大	しないことをあえて選ぶ	自己決定(無為・深い撤退)
	危険だから回避	自分のために、無理するのをやめる			変化を取捨選択	

「深い撤退」をしているはずだ。撤退が許される自己決定の生涯学習活動においては、立つ鳥跡を濁さず、人に迷惑をかけずにさわやかに撤退する力も必要なのである。

このように積極と消極を自己決定する人たちが、限りある地球と他者や社会のなかで生かされているという宿命を請け負いながら、自発的な学びと行動を通して、その他者や社会や地球に主体的に関与し返していくのである。